

【金沢文庫特別展『横浜の元祖 寶生寺』正誤表および追加記事】

■ 7頁10行

×弟子の圓眞が五代住持となったが、↓ ○弟子の圓眞が四代住持となったが、

■ 7頁11行

×~~木代住持~~の覚日が六代住持と ↓ ○覚日が五代住持と

■ 10頁4行

×横浜市の天然記念物に指定されている。↓ ○神奈川県の天然記念物に指定されている。

■ 12頁2段目

×光明真言 ↓ ○仏眼真言

*大日如来像納入品の「奉納目録」には「光明真言」と記されているが、該当する梵字真言の紙には光明真言ではなく仏眼真言が書かれている。

■ 58頁下段（22―8）市河季氏・比留間範数連署寄進状 本文4行目

×依正願儀^② ↓ ○正胤儀^②

*右傍に疑問符(力)をつけた文字は、原本では「瀨」の字の中央の「束」を「員」に置き換えた形をしている。これについて松澤常男氏「地名「横浜」の初見とされる文書の疑問」『横浜郷土史研究会会報』一〇〇号（平成17年3月）では、「胤」と解釈すべきであると提案され、同時にこれは転写の時の誤写で、永禄四年（一五六一）ごろに石河村から横浜村が分村されてから後に作られたものではないかという疑問を提起されている。

字形的に見ると、中世のくずし方では「胤」の右側を三つの点で表すことが多く、それをくずし方がよく似た「員」と認識して楷書で表現すれば、このような文字になるだろう。「正胤」は、東大寺や東寺の莊園支配に関する中世文書において、土地や所職の正統な権利継承者を示す用語として使われた例が見出され、「正員」とも表記されている（東京大学史料編纂所の古文書データベースによる）。それは、この宝生寺文書の文脈にもふさわしく、松澤氏の読み方は正鵠を得ている。

しかしこの文書を時期の下がる偽文書と解釈するのは行き過ぎであろう。嘉吉二年（一四四二）付のこの文書は次に続く宝徳二年（一四五〇）の宝生寺住持圓鎮寄進状（22―9）などと同じ筆跡であり、圓鎮が書いたものと推定されるからである。圓鎮は永享十一年（一四三九）九月に圓眞に宝生寺の遺跡を譲り、磯子真照寺の住持になったものと思われるが（ただし宝徳二年の寄進状（22―9）の圓鎮の署名には「石河宝生寺住持」とあり、宝生寺住持に再任した可能性がある）、圓鎮みずから横浜村薬師堂の免田畠の宝生寺への寄進状の本文を執筆して、管領上杉氏の奉行人と推定される市河・比留間両名の花押を求めたとすれば、偽作とは言えない。いずれにしても、永享十年（一四三八）十一月に鎌倉公方足利持氏が滅亡して鎌倉府が中絶し、続いて嘉吉元年（一四四一）に將軍義教も暗殺されて全国的に政治が混乱した時期に、宝生寺でも、寺領を確保するためにさまざまな文書の制作や加工が行われたものと推測される。今後の興味深い研究テーマになるであろう。

■ 72頁下段（22―19）本文1行目

×後北条市 ↓ ○後北条氏

■ 74頁上段（24―5）本文2行目

×文永二年（乙丑）四月廿六日 ↓ ○文永二年（乙丑）閏四月廿六日

■ 76頁上段 3〜4行目

×菩提院孝順 ↓ ○菩提院信遍

■ 追記 ■

展覧会開催中に、佐藤博信氏（千葉大学名誉教授）より、室町時代の鶴岡八幡宮別当の記録である『当社記録』（香象院珍祐記録）の中に石川宝生寺の記事が含まれていることを指摘されましたので御紹介いたします。該当する記事は次の二カ所です。『神道大系・鶴岡』所収」

【長禄三年（二四五九）閏九月】

一当社学頭 今月十一日被_レ定者也。へ当社神主□法流者時□奉頼□□彼学頭者在所石川ノ能化真性寺ト申人也 随分密教覚人、尤以可_レ然人躰也 自_レ元東寺真言也、雖_レ然被_レ法例一任於_レ当所一被_レ受者也。

【長禄四年（二四六〇）】

五月小

惠光院（権少僧都快重）

一去年学頭者、武州石川能化真性寺申者也。当社神主指南ニテ被_レ成_レ学頭一者也。然間受法者我覚院賢超法印奉_レ頼伝受畢。仍去年御八講ノ時分、号_レ学頭代一以_レ手替一論議、於_レ□難_レ心得一由依_レ申致_レ腹立一、自身罷上、御八講四ケ日之勤行ヲ結句十二月十五日二ケ日被_レ勤者也。然間社家ニモ難_レ心得一由被_レ仰。又者此方ニモ申間□□年明テ学頭職ヲ辞退被_レ申由、其間在_レ之。仍春四季講不_レ被_レ勤者也。然者辞退也。雖_レ然社家ヨリ重而是非ヲ不_レ被_レ仰間一、夏ノ四季講無_レ之。然間本様三人へ四月十一日_レ致_レ衆会一進止会所へ申旨者、既ニ春夏之四季講断絶也。然者学頭断絶時者、以_レ経供養一可_レ勤之由、前々記録明白也。学頭出現間、如_レ前々一以_レ経供養一可_レ勤由申處ニ、進止会所へ正覚院_レ被_レ申旨者、社家へ申、真性寺へ重而可_レ申由被_レ申間、尤同心仕處ニ、当執行神主重而学頭職真性寺申處ニ、堅辞退申者也。然間本様三人同心、社家へ申旨者、学頭断絶不_レ可_レ然次第也。依_レ春夏四季講勤行無_レ之。所詮可_レ相尋一由申處、社家御返事者、以前真性寺望時分、神川金蔵坊ト申者、対_レ安楽院一望シカト、ハヤ真性寺定由申也。然者其金蔵坊方へ可_レ申由被_レ仰以前安楽院対望間、安楽院へ被_レ仰間、廳安楽院被_レ下被_レ申處ニ金蔵坊辞退也。然間社家ニモ以前ハ我望、又申時者自体難_レ心得_レ哉。被_レ仰_レ二度一者不_レ被_レ仰者也。仍横地石見為_レ使者一本様三人方へ被_レ仰旨者、金蔵坊以前望間申處ニ、無_レ領掌一候。然間二反与不_レ可_レ申者也。以前可_レ相尋一由候。相尋候へト承間、手廣能化青蓮寺与申仁□三人以_レ同心一学頭衆請仕状ヲ遣。又社務へ奏者間、石見入道ノ状ソへ遣處ニ一反ハ辞退也。雖_レ然三人ノ意見ニテ横地石見入道ヲ以、内彼青蓮寺へ越、堅申間領掌也。仍今月廿一日社家へ致_レ参上一御対面在_レ之。廳補任被_レ給者也。

ここに登場する「武州石川能化真性寺」とは、宝生寺三代住持を勤めた後に永享十一年（一四三九）九月十五日に引退して磯子真照寺に移った円鎮のことです。『血脉抄』（展示図録24―10）によれば、円鎮は平子師通の子で、智行に優れ「雪下学頭」を二三年勤めたと記されています。長禄三年（二四五九）には鶴岡八幡宮の学頭職を勤めたものの、翌年には法を伝授した弟子分の鶴岡別当の我覚院賢超が代理と称して勝手に論議の役を行ってしまったため、円鎮はこれに憤慨して法華八講を二日間だけ勤めて辞退して帰ってしまいました。これによつて八幡宮の仏事が中断し、困った社家方が、以前円鎮と学頭職を競った神川（神奈川）の金蔵坊を代わりに立てようとしたが、金蔵坊は辞退し、最終的に手広青蓮寺の住持が学頭職に就いたという内容です。

この記事からは、実家の平子氏の支援を受けた円鎮が、東国の仏教界の最高の権威である鶴岡八幡宮寺に対しても強気に出られるだけの実力をそなえ、関東真言宗の重鎮として一目置かれていたことが浮かび上がります。ちなみに学頭職を競望した神奈川の金蔵坊は、横浜市神奈川区東神奈川一丁目にある金蔵院（真言宗智山派）と考えられ、宝生寺の対岸にあたる神奈川湊に立地した有力な真言寺院であったようです。手広青蓮寺も鎌倉を代表する真言宗の有力寺院です。この記録は、鎌倉を中心とする真言宗寺院のつながりを示す貴重な史料と言えます。